

社会にあらわれる老い、人々に生きられる老い

— 人類学における老いの対象化について —

菅沼 文乃*

19世紀後半に成立した人類学において、老いや老年者が本格的に研究対象として扱われるようになった歴史は比較的浅い。しかし20世紀末以降、世界的な人口高齢化もあって、老いの具体的な事例を対象とする人類学的研究は確実に蓄積されている。

人類学における老いの対象化には、①宗教や親族といった人類学的研究テーマに沿った議論、②社会的に対応すべき課題としての老い、およびその当事者である老年者への視線、③各社会の文脈における老いの多様性、個人が今生きる老いへのまなざし、の3つの視座がある。これらの対象化がなされるまでの過程には、人類学の研究対象となってきた非西洋社会を含む全社会的な状況の変化や、ポストモダン人類学的な対象設定・接近方法への疑問視に対する挑戦的な試み、絶え間ない模索があった。

さらに近年はとりわけローカルで具体的な事例への接近傾向がみられ、老いの実態、老年者という人の生についての多角的かつ重層的なアプローチは一層充実していくと想定される。一方で、個別事例への過剰な傾倒は、人に普遍的な老いという現象の検討可能性を狭めることになりかねないことから、さらなる模索が求められる状況にある。

キーワード

老い、老年者、対象化、研究史

目次

- | | |
|-----------------------------------|-----------------------------|
| I 人類学と老い——インフォーマントから研究対象へ | III 対象への接近——コミュニティと個人、歴史と経験 |
| II 老いの全体論的理解 | 1 老いの民族誌的記述 |
| 1 構造機能論的アプローチ | 2 老いの内的な記述——経験とつながり |
| 2 文化的事象としての老い・老年者とその社会的位置づけに関する研究 | IV まとめと展望 |

I 人類学と老い

——インフォーマントから研究対象へ

人類学は長い間、老年者¹と密接な関係を維持し続けてきた(片多 1982、Clark 1967)。日本の人類学に

おける老い研究の先駆的存在である片多順は、その理由を「①老人のほうが村の歴史や文化についてよりよく知っている。②かれらは村の政治・経済・祭祀組織などの中心的地位を占めているばあが多い。③老人の多くが村に残っており、また家の近くで比較的軽い

* 南山大学

¹ 人類学などの研究ではほかに老人、年長者、年配者、高齢者などの語が用いられることがあるが、本稿では基本的に「老年者」に統一する。

仕事をしているので訪ねやすい」(片多 1982: 363)とし、「人類学者たちが世界の各地でフィールドワークを行う際に、もっとも力強い協力者ともいべきインフォーマントになってくれるのは、ほかならぬ「老人たち」だ」(片多 2004: 224)と述べる。

実際、民族誌の作成への老年者の寄与は数知れずある。たとえば『水の神』(1981 (1946))において33日間にわたってグリオールにドゴンの神話的世界を語り聞かせた古老オゴテメリの存在は、人類学者が専門的知識保有者への視線を向けるきっかけとなったし(グリオール 1981)、キージンはソロモン諸島クワイオ族のエロタ老人が語る個人史を追うかたちで、クワイオの生活様式を描き出した(キージンは 1985)。日本では、アイヌの信仰と儀式の豊富な知識をもつエカシ(長老)である葛野辰次郎がアイヌ文化に関する多数の調査に協力し(梅原・藤村(編)1990、アイヌ民俗学物館(編)2002など)、自身もアイヌ文化についての著作を発表している(葛野 1978など)。このように、老年者の長い人生経験の中で培われた技術・能力や蓄積された戦略的・社会的・政治的・宗教的知識は、人類学者がフィールドの総体的理解を深めるうえで重要な情報であった。

しかしながら、若い・老年者そのものを対象とし、これを問い直す研究の登場は、人類学が学問として始まってから半世紀以上を待たねばならない。それ以前の人類学の議論に若いへの言及が皆無であったわけではないが、片多が「伝統的関連分野」(片多 1982: 365)とよぶ、長老制や年齢階梯制、祖先崇拜、親族関係などの人類学的視点および方法論の展開のなかで取り上げられるにとどまっており、初期の人類学において若いや老年者を体系的に論じる研究はほぼなかったといってよい。

人類学において若いを対象とした研究が後発であった背景には、初期の人類学者が属する西洋近現代の若い・老年者が、近代化や都市化にともなう諸問題——たとえば核家族化の進行にともなう独居老人の増加や、資本主義経済下の労働環境と制度に基づく定年退職や引退が老年者に及ぼす影響——などの対象として論じられてきたことがある。対して当時、人類学が研

究対象としてきた非西洋社会にはこれらの問題が認められなかったことから、「いわゆる未開社会には、“老人はいなかったし、いても老人問題はなかった”」(片多 1982: 363)のだと片多は指摘する。

しかし、冒頭で述べたとおり現在西洋・非西洋の別を問わず若い・老年者の研究は確実に増加しており、筆者自身も2000年代後半から、人類学や民俗学的研究が長らく対象としてきた沖縄の、都市部に暮らす老年者一人ひとりの老いる営みをテーマとして調査研究を実施してきた。本稿では、この経験から実感を強めた、若い・老年者をどう対象化するのか——社会のなかで位置づけられる若い・老年者と、個々人の生からみたそれらをどう接続していくのか——という疑問、また若い・老年者に関する事象への学問からの応答はいかになされるかという問いについて、片多(片多 1982, 2004)と高橋絵里香(2013)による研究史の整理を参照しながら、要点を確認していく。

II 若いの全体論的理解

人類学的研究において、若い文化や社会形態に規定されるという主張は現在まで通底しており、最初期の人類学の研究対象となった非西洋の「伝統的」な社会から現代に至るまで数多くの若いのかたちが報告されている。本章では、片多の言う「伝統的関連分野」に類する研究視点として、老年者という存在や老年者集団を実在的な対象として設定する姿勢に立った研究を概観する。これらの研究は人類学的な「全体論的な記述と解釈の特徴を保持」(高橋 2013: 51)した理解であり、その特徴は①若いはライフコース全体の中に位置づけられ、老年者は社会の全体性のなかで論じられるべきであるとする学問的指向、②老年期における適応²への関心、とくに近代化した社会において、人は加齢によって社会関係から離脱していくと考える「離脱理論」³への、特に非西洋社会からの反論、の2点である(高橋 2013: 48-54)。

1 構造機能論的アプローチ

人類学における若い・老年者に関する初期からの研

2 発達・臨床心理学で示される概念である。ここでは、個人が老年期をどのように迎えるように過ごすかは、引退や死別といった人生上の課題に数多く直面する老年期への適応の度合いによるとする一連の議論(Reichard, Livson & Petersen 1968など)をさす。

3 老年社会学で示される概念で、老年期は「不可避的な撤退」と「離脱」の過程にあるとする。離脱理論においては老化とともに活動レベルを下げていく・社会的地位を失うのは自然・普遍的な現象であり、老年者の役割は「役割なき役割」とみなされる(Cumming & Henry 1961)。

究のひとつは、年齢階梯制ないし年齢階層理論を中心とした構造機能主義的研究のなかで展開する。

年齢階梯制・年齢階層の制度は、同世代の成員が集団（年齢集団）を形成し、その段階に応じて社会的立場・役割が決定されるシステムであり、その社会において相対的に老いを定める指標になる。ここでは老年者はしばしば知識の保有や宗教・信仰上の地位・立場と結び付けられる。例えばスチュアート・ヘンリはイヌイットの事例について、イヌイットの人生過程における3つのライフステージのうちの老人（インナクハック）は、厳しい環境を生き抜くための知識・知恵の宝庫、生き字引として信頼されることをあげている（ヘンリ 2004：118-119）。また長老制をとるエチオピアのシダモ族では、長老は土地や家畜などの資源配分、紛争の調停、政治的・自然災害的危機への対応・解決、儀礼、とくに死の儀礼を執り行う役目を期待される。この根拠としてあげられるのが、老年者が慣習法や各種儀礼についての知識を所有していることに加えて、社会の中でも先祖（死者）に近い立場であるために強い霊力をもつという観念である（青柳 2004）。この、死者や霊的存在に最も近いもの・霊的・呪的力をもつものとしての老年者の理解は日本国内でも広くみられる（比嘉 2000など）。日本民俗学分野においては柳田國男による歳神・祖霊信仰の分析（柳田 1946）、折口信夫による「翁」と山の神との親和性の指摘（折口 1929）をはじめ、長寿儀礼が長寿者の力にあやかるという意味をもつことの指摘（酒井 1987：386、板橋 2000など）、長寿者にまつわる生前葬の形をとる儀礼の報告（古家 2009：36-37）もこの文脈に位置付けられよう。

また日本社会における老年者への役割期待については、西日本の漁村にみられる宮座を対象とした研究に言及がみられる（高橋 1978、関沢 2000など）。たとえば三重県鳥羽市上島の八代神社の祭祀をつとめる宮持、葬式にあたり装具の整備や太鼓打ちをする隠居衆、奈良県奈良市奈良坂の社守の役割を果たす老中、奈良市大柳生の神の守役を任される当屋（長老）などの事例である。老年者が祭祀についての実際の知識を保持し、また儀礼執行に当たる役割を担う事例についても、

日本全国にみることができる。筆者が研究対象とする沖縄の民俗学的研究⁴でも、親族集団内、家庭内の祭祀実践にみられる年長者の優位性の指摘（大橋 1998：487-496）、沖縄県久高島の神事組織の年齢別構成（鎌田 1994）や宮古島の祭祀組織にみられる年齢階梯のシステム（平井 2012）のように、一定の年齢や年長であることに祭祀上の役割が見出される事例が示されている。

年齢階梯制をはじめとする世代階層への視線からの研究は、社会学分野であつかわれるライフコース・ライフサイクル概念との関連が深い。社会学的なライフコース理解では、個人の人生は段階的に区分・規定され、社会システムと相関的に規範・価値観・役割を付与される（Riley & Abeles 1987、Atchley 2000、ギデンズ 2009：202）。ギデンズは、老年期が他のライフコース段階と区分され、老年期特有の機能や役割が付与されることを「老いの社会化」と定義する（ギデンズ 2009：197-223）。人類学分野でも、「老年」として位置づけられる社会的立場や生理的な変化の指標が「文化的老人線」と定義される⁵（片多 2004：223-238）。社会的立場の変化とは、社会における地位、役割などの変化のことであり、たとえば日本の隠居制度がそれにあたる。一方、生理的変化とは、主に生殖機能（とくに閉経）、排泄行為を基準とし、それらが身体的な老化により困難または不可能になることを指す（片多 2004：223-238）。日本民俗学分野にも、老年者を子どもとの霊的親和性から検討し、日本社会の老いをライフサイクル概念と境界論から整理する翁童論（山折 1991、宮田 1996など）の研究がある。しかし民族誌・民俗誌における人の一生の記述は洋の東西を問わず出産・成人・婚姻・死への関心が強く、老年・長寿に関する報告は少ない。

老いへの構造機能論的アプローチには、先述した、文化事象を社会の全体性の中から論じるという人類学的規範が顕著に現れている。個人の人生は生活環境としての社会が与える諸作用との連環から理解され、老いはあくまで社会全体の、連続する世代のなかに位置づけられ論じられる傾向にある。

4 沖縄の民俗研究は日本民俗学とはやや系譜を異にする部分もあるが、詳細は本稿の主軸からはずれるため別稿に譲ることとする。ここでは沖縄出身者による沖縄を対象とした総体的な学問領域である「沖縄学」との関連をあげておくにとどめたい。

5 年齢によって「老年」というカテゴリーを設ける老人線もある。日本の場合、65歳以上の人間が「高齢者」として扱われる。この基準は1963年に制定された老人福祉法によるものであり、社会による福祉の諸制度はこの基準によって適用される。

2 文化的事象としての若い・老年者とその社会的 位置づけに関する研究

若い・老年者への構造機能論的アプローチと時を同じくして、若い・老年者に関する文化的事象の分布研究や文化要素項目の作成・文化間比較が展開されている。

その最初期にあたる Simmons (1970) の老人の優遇／冷遇の文化的要因・生態的要因についての通文化研究、Clark と Anderson (1967) によるアメリカのいくつかの民族集団における文化とパーソナリティの研究、Shanas ら (1961) によるヨーロッパの3つの近代社会における老年者の生活調査などからは、それぞれの社会が、それぞれの価値観・世界観・環境・社会的状況によって、異なる方法で老年者への尊敬を構造化している具体的な事例が示されている。日本社会の研究については、還暦などの長寿祝い・年祝いや敬老慣行のほか、年齢階層的理解にも関連する隠居・定年などの社会制度についての民俗学的研究がみられる(高橋 1978、関沢 2003など)。

さらに Cowgill と Holmes は社会変動の視点を導入し、①老年者とその成人子の家族の間にはいくつかの相互責任があること、②老年者を大切にすることが求められること、③老年期においても生は価値あるものであり、人々は長生きを求めること、の3点が多くの社会で共通すること、このうえで老年者の地位は社会の発展・近代化と反比例することを主張する(Cowgill and Holmes 1972)。この“若いの近代化理論”は、社会変化によって若いにまつわる事象への意味づけが変容することを示すものであり、現在までの社会的・文化的若いの理解におけるひとつの規範となっている。たとえば、資本主義経済の導入は生産作物の変化や賃労働の増加を引き起こし、結果として生活における老年者の知識の重要性を低下させるとする説明(青柳 2004)、都市化により拡大家族が減少、核家族化が進行することで老年者は孤立させられ、職場においては老年者は引退を迫られ、若い労働者に労働の場を譲り渡すことにつながるとする Burgess の分析(Burgess

1969) がこれにあたる。

また年長者に対するネガティブな社会的対応自体も、人類学に限らず古くから強い関心を集めている。ボーヴォワールは社会的に行われる棄老や老年者の自死について、古代ギリシア・ローマ時代から20世紀に至る古今東西の社会における若い観と老年者の社会的立場に関する人類学、民俗学、社会学、哲学、医学その他の幅広い知見から多くの事例をあげて論じている(ボーヴォワール 2013 (1970))。日本民俗学においても、柳田(柳田 1970 (1945))にはじまる棄老慣行の実在性に言及する議論、民話としての棄老説話の類型論、棄老伝説の比較研究が多くある⁶(稲田・大島ほか(編) 1977、宮田 1996、市野澤 2008など)。さらに社会学分野では老年者全般が社会によって否定的な役割・イメージを付与されることによる偏見・差別の存在、それが「若いことに価値がある」とみなす風潮から生じるとするエイジズムの概念が提示されている⁷(Butler 1969)。

一方で、近代化と老年者の社会的立場の関係は近代化理論で説明されるほど単純でないとする意見もある。たとえばアッカンプアムは、今日の一般化している老年者たちに向けられる肯定的・否定的・両義的な態度をユダヤ＝キリスト教の文化との関連から整理し、老年者への態度の変化は必ずしも工業化などの社会変化によって引き起こされたわけではなかったとする(アッカンプアム他 2000)。西洋以外の社会を対象とする研究では、著しい近代化と高齢化が進行するカンボジアで、地域発展のために老年者のもつ生活のための技術や儀式の知識が必要とされる場面の報告(遠藤 2000)、オセアニア・ヴァヌアツを事例とした、現代において老年者という社会的立場が必ずしも“伝統的な生活実践”の知識とむすびつけられるわけではないことの指摘(福井 2008)があげられる。2016年に出版された『アフリカの老人』では、将来の高齢化を見据えたアフリカ各地のローカルな若い人が実に多様に描かれており、現代アフリカにおいて近代化をはじめとする社会変化が一概に老年者の地位を低下させ彼ら

6 昨今マスメディア等でみられる現代の高齢化問題、とくに老年者扶養・施設入所に関する問題を棄老伝説と関連付けて論じる風潮を問う研究・論説もある(山田 2019)。

7 一方で、税金の控除など老齢であることが優遇的にあつかわれる差別(肯定的エイジズム)の指摘もある(パルモア 2002)。

を社会的な弱者とするわけではないことが示唆される(田川・慶田・花淵(編)2016)⁸。

以上のように、文化的事象としての老いに着目する研究は近年の社会変化の中で多面的な広がりを見せているが、一方でこれらの議論には、日本民俗学において岡田浩樹が疑問視するネガティブな老年者イメージを否定する構図(岡田 2001)が潜んでいることは見逃してはならない。この構図はすなわち、離脱理論やその対として頻りに示される老年期の生活満足度は社会的活動によって高まるとする活動理論⁹(Havighurst 1961、Lemon 1972)、老年心理学分野における老年期への適応についての研究(Reichard, Livson & Petersen 1968)を背景とするものであり、研究者はこうした老いの研究の前提・そこにひそむ政治性に意識的である必要があるだろう。そのうえで、学問的見識に基づいた社会への応答も積極的になされるべきと筆者は考える。たとえば社会学分野では、パーソンズは老年期にある人がいかに社会に適応するかという老年社会学的課題について、老年者が社会から疎外されないためには老年者側からの加齢への順応の必要性だけでなく社会がその社会的役割を見出す必要があるとしている(Parsons 1960)。またギデンズは、近代工業社会のシステムである加齢にともなう有給労働からの引退、および子との別離が老後に意味を見出すことを困難にしていることを指摘する一方で、新たなライフコース段階——生涯教育にともなう新たな教育段階としての高齢期——の誕生を予見している(ギデンズ 2009: 197-223)。ボーヴォワールは老いの衰退は「社会の責任」(ボーヴォワール 2013: 314)であると断じたうえで、老年期においても人間が一個の人間であり続けることができる社会が理想であると述べ(ボーヴォワール 2013: 311-316)、上野千鶴子はボーヴォワールのこの論を実存主義と結びつけながら、「老いを老いとして引き受ける」(上野 2021: 103)という生き方の提案へとつなげている¹⁰。こうした老いをめぐる

社会的応答について、人類学からの可能性のひとつが、次章にとりあげる老い・老年者それ自体にせまる研究視点である。

III 対象への接近

——コミュニティと個人、歴史と経験

前章で概観した全体論的研究は、老いや老年者そのものを検討の対象とするというよりは、文化的・社会的老いの様相や老年者の位置づけ——いうならば「社会にあらわれる老い」——に視線を向けるものといえる。一方、全世界的な高齢化の進行、それへの社会的対応が喫緊の課題とされる現在、「人々に生きられている老い」「老後を生きている老年者」それ自体を対象とする研究が目立つようになっている。

この章では、老い・老年者それ自体を対象とする、民族誌的記述をともなう研究を概観する。先に述べておきたいのは、『文化を書く』(Clifford & Marcus 1986)に代表されるポストモダン人類学の登場以降、人類学の議論の強調点が自らが属する社会に対する批判的役割を担うことに向けられ、社会現象への関心が強く呼び起こされたことである。本章の要点のひとつを先立って示すことになるが、「老年者」というある種特殊な社会的位置づけにある人々を対象とする研究志向も、この流れに位置づけられる。

1 老いの民族誌的記述

2000年を前後して、社会のなかの老い・老年者の位置づけを意識しながらひとつの対象集団として老年者を対象化し、その姿を民族誌的に記述しようとする試みが登場している(藤田 1999、青柳(編)2004、Gullette 2004、Sokolovsky 2009など)。たとえばアメリカの退職者コミュニティ(Takenami 2012、田原 2007、木村 2006など)、高齢者住宅(Keith 1982)、ナーシングホームでの調査研究(Henderson & Vesperi 1995、

⁸ ただ、近代化理論への反論に非西洋社会を事例とする際、オリエンタリズム的思考に陥らないよう注意しなければならない。たとえばパルモアの1970年代前後の日本を対象とした研究では、日本の年齢と年功にもとづくタテ関係への志向がきわめて強いことに注目し、このことによって日本の老年者の地位は高くなること、そのルーツは儒教や祖先崇拜にたどることができること、こうした敬老のありかたは第二次大戦以降変化してきているものの、近年の公的な場での老人問題に対する関心をみても、敬老精神は根強く残っていることが示されている(パルモア、前田 1988)。この研究は近代化する日本社会を例に離脱理論への反論を示すものであるが、前提として日本全体を包括的に対象に設定してしまっていること、さらに西洋近代が非西洋社会を理想化するまなごしに満ちているという点から、反省的に振り返るべき例でもある。

⁹ 人は加齢にともないその地位と役割を喪失していくが、そのなかで代替する活動を見つけ出し、適当なレベルの社会活動度を維持すべきとする。

¹⁰ 老いの実存主義的理解として、ほかに中井久夫(1987)、下地明友(2002、2003)の論をあげておく。

Gubrium & Holstein 1999など)、日本社会を対象とした研究では地域の高齢者向け福祉サービスの研究(佐野・藤田 1988)、地域の老人会のケーススタディ(ベン＝アリ 1989)、東京巣鴨のとげぬき地蔵に集まる高齢者を対象とした調査報告(倉沢 1993)などである。また、高齢者の社会への包摂を課題とする問題意識¹¹に基づく研究群もある。このなかには高齢者コミュニティや福祉の場面だけでなく、伝統行事や地域祭事、親族関係など人類学や日本民俗学の研究のなかで老い・高齢者と関連付けられてきた場を対象とするものも多く、これらの活動にたずさわる高齢者の役割と自己認識との関係性が論じられる(宮田他(編) 2000、関沢 2003: 57-96)。さらにこれらの研究は高齢化にともなう社会的課題への応答を直接的に目指す実践的議論でもあり(Warren 1998)、高橋はこの流れについて「人類学者たちが「未開社会」から己の足元のフィールドへと目を転じた結果であると同時に、自国の内部に老人という新しい「他者」を発見したことを意味している」(高橋 2013: 52)と評する。

加えて、とくに福祉・政策論の文脈で、社会問題としての高齢化を前提とするあまりに高齢者を「保護され福祉を提供されるべき身体的・社会的弱者」として固定的に設定する傾向への批判的議論も活発になっている。すなわち、医療の場面で高齢者の身体を認知症などの疾病・疾患・虚弱という型にはめて語ったり、高齢者コミュニティを安易に社会内のマイノリティ集団としてしまうことへの疑問である。この問題提起については、高齢者・高齢者コミュニティのイメージにまつわる文化的ステレオタイプを分析するO'Reillyの研究(O'Reilly 1997: 33-36)、ニューヨークにおける高齢者へのまなざしをめぐるムーアの著作(ムーア 1988 (1985))、医療人類学者Kaufmanによる老後の自己意識の研究(Kaufman 1994)などがあげられよう。とくにKaufmanは、医療の文脈で老いが認知症などの疾病・疾患に結び付けられやすい傾向に対して、医療が高齢者にどのように影響するかという文化的視点を付け加えることの有用性を論じており、これにしたがいいくつかの認知症ケアにおける医療人類学的研究が発表されている(Henderson & Traphagan 2005、Leibing

& Cohen 2006など)。

もうひとつ、前章で触れた社会変動と老い・高齢者の状況への関心として、離脱理論への反証に限らず「近代化という言葉でひとくくりにはできないような社会変容」(高橋 2013: 75)のなかにある老いを検討する試みがある。とくに東南アジアやアフリカなどの、いわゆる途上国とされる地域を対象とする研究にその傾向がみられる。社会保障の整備が十分でないにもかかわらず高齢化が急速に進行していくなかでの社会福祉の実践、従来の地域・家庭・親族内での老親扶養のありかたやその変化に言及する研究(Goodman & Kwon & White (eds.) 1998、Sharma (ed.) 2007、岩佐 2011、田川他(編) 2016、中村 2017、伊藤 2017、加藤 2019など)、移民などのエスニック・マイノリティ内の高齢者をテーマとする研究(金本 2009、2010など)などである。

2 老いの内的な記述——経験とつながり

より内的でミクロな視点にたち、社会の中で主体的な経験として生きられる老いをとらえようとする研究視点も登場している。内的といっても心理学的問題意識にたつ・視点を限定するものではなく、一人ひとりの個人が生きる老いの様相、その社会のなかの高齢者の生を鮮明に描写することを目的とする。個別の老いを文化的コンテクストの影響に注視して分析するカウフマンの研究(カウフマン 1988 (1986))、沖縄離島の高齢者の「老いる経験」自体を対象とし、老いをめぐる人々のつながりを、島で老いるという歴史的、地理的、そして一人ひとりの人生の背景を含ませつつ記述する後藤晴子の研究(後藤 2017)などがそれにあたる¹²。

また高齢者福祉・ケアの現場を舞台とした研究では、福祉の制度・ケアの枠組みから福祉・ケアが行われている場、その現場で福祉・ケアを提供する人、福祉・ケアを提供される側である高齢者、そして彼らのおかれる地域的・文化的コンテクストまでの、生きられる老いに関与する複数の階層・行為者へと視線が向けられる。鈴木七美は高齢者への介護・ケアがもつ関係の相互性と個性から福祉制度を問い直す調査研究

¹¹ 看護学・介護学・福祉政策研究の視点から、老年期における社会的孤立がQOLに与える影響が強く問題視され、活発な議論が行われている(永田他 1981、Kahn 1983、藤原他 1987、大湾他 2003、當山他 2003、佐々木 2005など)。

¹² 必ずしも高齢者を対象とするわけではないが、社会の様相と個人の経験とを関連付けて追うという問題意識に関連するものとして、ライフストーリー研究(小林・浅野編 2018など)や、自らの人生経験を記述した著作作品である自分史の研究(小林 1997、プラマー 1998 (1995))にもふれておきたい。

を行っている（鈴木 2005）。また高橋は近著で、調査地であるフィンランド群島町の福祉、そこでケアの提供にかかわるケアワーカー、ケアを受ける老年者の姿を風土、家族、地理、価値観といった事象のなかに配置し丹念に描いている（高橋 2019）。さらには老いの先にある死の様相への関心もここに位置づけられよう。浮ヶ谷幸代は、日本社会的な「看取り文化」について、近年これが失われつつある一方でローカルな「看取り文化」が生じていることを、ルームシェア型ホームの事例から示唆している（浮ヶ谷 2019）。

これらの研究で重要なのは、福祉を単純な政治性・権力の視点からとらえるのでないこと、老年者が家族やスタッフ、ほかの利用者との関係性を構築し、生活領域を形成していくさまへの繊細な注目こそが、老年者をホームの入所者でも福祉の対象でもなく、浮ヶ谷の言葉でいう「生活者」（浮ヶ谷 2019）として見出すことにつながるという視座である。

IV まとめと展望

以上、人類学における老いの対象化について、周辺分野を含めて整理し、①宗教や親族といった人類学的研究テーマに沿った議論、②社会的に対応すべき課題としての老い、およびその当事者である老年者への視線、③各社会の文脈における老いの多様性、個人が今生きる老いへのまなざし、の3つの視座を指摘した。この展開の背景には、初期の人類学が研究対象としてきた非西洋社会をふくめた全世界的な社会高齢化という契機、そして応用人類学・公共人類学的な、積極的に現場に介入し人類学を役立てていくことへの関心の高まりがある。

筆者が、冒頭で触れた自らの研究関心からとくに注目したいのは、老いをめぐる社会的・個人的課題についての学問的見識に基づいた人類学からの応答に③の視座、とくに今生きられている老いへの視線が果たす役割である。多様化が進む現代社会において、個々人それぞれが生きる個別の老いの様相・老いの課題はますます注目されていくことが予見される。その抽出・描写・そして還元にあたって人類学が得意とするローカルで具体的な事例への視線は大きな役割を果たすと考えられる。また近年、医療や福祉などの人類学以外の分野でもフィールドワークや民族誌という人類学的研究手法が用いられるようになってきていることから、老いの様相、老年者の生についてのマイクロなアプローチ

は一層充実していくと想定される。

一方で、個別事例への過剰な傾倒は、人類学が目的としてきた人の理解、その一環としての人に普遍的な老いという現象の検討可能性を狭めることになりかねないことには十分留意しておきたい。このことをふまえると、今後取り掛からねばならないのは、今個人が生きるそれぞれの老い、すなわち現場の老いの理解を、各社会にあらわれるそれぞれの老い、ひいては人類に共通する現象としての老いの総体的理解にいかにつなげるか、その方法論を構築することであろう。

参考文献

（日本語文献）

青柳 まちこ

2004 「序章 老いの人類学」『老いの人類学』青柳まちこ（編）、pp. 1-22、世界思想社。

アッカンプアム、A.、MMPG 総研、伊原 和人

2000 (1986) 『アメリカ社会保障の光と陰——マネジドケアから介護まで』住居広士（訳）、大学教育出版。

板橋 春夫

2000 「長寿のあやかり——赤飯・長寿銭の習俗」『老熟の力——豊かな〈老い〉を求めて』日本民俗学会（監修）、宮田登、森謙二、網野房子（編）、pp. 197-212、早稲田大学出版部。

伊藤 眞

2017 「高齢者像の変貌 インドネシアの事例を中心に」『東南アジア地域研究入門2 社会』山本信人（監修）、宮原暁（編著）、pp. 163-180、慶應義塾大学出版会。

稲田 浩二、大島 建彦、川端 豊彦、福田 晃、三原 幸久（編）

1977 『日本昔話事典』弘文堂。

市野澤 潤平

2008 「棄老伝承の語る老いと死——構造分析による読解の試み」『日本民俗学』255：66-104。

岩佐 光弘

2011 「老親扶養からみたラオス低地農村部における親子関係の一考察」『文化人類学』75(4)：602-612。

上野 千鶴子

2021 『ボーヴォワール 老い——年齢に抗わない』NHK 出版。

浮ヶ谷 幸代

2019 「ルームシェアで最期を迎える 神奈川県藤沢市UR住宅の小規模多機能ホーム〈ぐるんとび〉の取り組みから」『文化人類学』84(3)：314-330。

梅原 猛、藤村 久和（編）

1990 『アイヌ学の夜明け』小学館。

遠藤 宣雄

2000 「カンボジアの村落における文化遺産教育——ア

- ンコール地域の文化発展と老人の役割』『上智アジア学』18：263-272。
- 大橋 英寿
1998 『沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究』弘文堂。
- 大湾 明美、佐久川 政吉、大川 嶺子、下地 幸子、富本 傳、根原 憲永
2003 「離島における施設入所高齢者の生きがいづくりに関する研究——『ふるさと訪問事業化への取り組みのプロセスと事業評価・課題』『沖縄県立看護大学紀要』4：37-47。
- 岡田 浩樹
2001 『『老人の民俗学』再考』『国立歴史民俗博物館研究報告』91：451-467。
- 折口 信夫
1929 「翁の発生」『古代研究 民俗学篇第一』pp. 478-536、大岡山書店。
- カウフマン, S. R.
1988 (1986) 『エイジレス・セルフ 若い自己発見』幾島幸子 (訳)、筑摩書房。
- 片多 順
1982 「文化人類学的老人研究の展望」『民族学研究』46 (4)：357-375。
1996 「沖縄における長寿儀礼の研究」『福岡大学総合研究所報』182：27-43。
2004 「長寿のシマ沖縄の高齢者たち」『『若い人類学』研究史』『若い人類学』青柳まちこ (編)、pp. 223-241、世界思想社。
- 加藤 敦文
2019 「『ベトナム村落の独居高齢者をめぐる家族規範の形成と実践の複相性：文化人類学的研究』研究経過報告書』『京都産業大学総合学術研究所所報』14：137-146。
- 金本 伊津子
2009 「長期にわたる異文化接触による文化変容 アメリカ・ブラジルにおける日系高齢者のフィールドワークをとらえて」『桃山学院大学総合研究所紀要』34(3)：53-60。
2010 「探る——ブラジル日系高齢者のアイデンティティとウェルビーイング」『高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働』鈴木七美、藤原久仁子、岩佐光広 (編著)、pp. 117-131、お茶の水書房。
- 鎌田 久子
1994 「老の民俗：女性民俗の立場から」『日本常民文化紀要』17：141-172。
- キージング, R. M.
1985 (1983) 『マライタのエロタ老人——ソロモン諸島でのフィールド・ノート』青柳まちこ (訳)、ホルト・サウンダーズ・ジャパン。
- ギデンズ, A.
2004 (2001) 『社会学 (第4版)』松尾精文、西岡八郎、藤井達也、小幡正敏、叶堂隆三、立松隆介、内田健 (訳)、而立書房。
2009 (2006) 『社会学 (第5版)』松尾精文、西岡八郎、藤井達也、小幡正敏、叶堂隆三、立松隆介、内田健 (訳)、而立書房。
- 木村 オリエ
2006 「初期リタイアメントコミュニティにおけるボランティア活動の展開：アリゾナ州サンシティの事例」『お茶の水地理』46：47-60。
- 葛野 辰次郎 (述)、アイヌ民族博物館 (編)
2002 『葛野辰次郎の伝承 アイヌ民族博物館伝承記録7』アイヌ民族博物館。
- 葛野 辰次郎
1978 『キムスポ』自費出版。
- 倉沢 進 (編)
1993 『大都市高齢者と盛り場』日本評論社。
- グリオール
1981 『水の神——ドゴン族の神話的世界』坂井信三、竹沢尚一郎 (訳)、せりか書房。
- 後藤 晴子
2017 『老いる経験の民族誌——南島で生きる〈トシヨリ〉の日常実践と物語』九州大学出版会。
- 小林 多寿子
1997 『物語られる「人生」——自分史を書くということ』学陽書房。
- 小林 多寿子、浅野 智彦 (編)
2018 『自己語りの社会学——ライフストーリー・問題経験・当事者研究』新曜社。
- サイード, エドワード・W.
1986 (1978) 『オリエンタリズム (上)』今沢紀子 (訳)、平凡社。
- 酒井 卯作
1987 『琉球列島における死霊祭祀の構造』第一書房。
- 佐々木 寿美
2005 『現代日本の政策形成と住民意識——高齢者福祉の展開過程』慶應義塾大学出版会。
- 佐野 敏行、藤田 真理子
1988 「老人の「場」と役割：コミュニティーのコンテクストにおける民族誌的分析」『民族学研究』53 (3)：310-320。
- 下地 明友
2002 「風土と老人観——医療人類学的視点から」『老年精神医学雑誌』13(5)：502-507。
2003 「世に棲む若い人の臨床人類学」『高齢社会 どう変わる・どう生きる』二塚信、嵯峨忠 (編著)、pp. 147-168、九州大学出版会。
- 鈴木 七美
2005 「柿の葉を摘む暮らし——ノーマライゼーションを超えて」『文化人類学』70(3)：355-378。

- スチュアート・ヘンリ
2004 「今を生きるイヌイトの老人——知識と技術の宝庫」『老いの人類学』青柳まちこ(編)、pp. 115-135、世界思想社。
- 関沢 まゆみ
2000 『宮座と老人の民俗』吉川弘文館。
2003 『隠居と定年——老いの民俗学的考察』臨川書店。
- 高橋 絵里香
2002 「ナーシングホーム民族誌の展開」『民族学研究』67(3)：328-339。
2013 『老いを歩む人びと——高齢者の日常からみた福祉国家フィンランドの民族誌』勁草書房。
2019 『ひとりで暮らす、ひとりを支える——フィンランド高齢者ケアのエスノグラフィー』青土社。
- 高橋 統一
1977 「年齢集団」『講座・比較文化第6巻 日本人の社会』伊東俊太郎等(編)、pp. 41-65、研究社。
1978 『宮座の構造と変化——祭祀長老制の社会人類学的研究』未来社。
- 田川 玄、慶田 勝彦、花淵 馨也(編)
2016 『アフリカの老人——老いの制度と力をめぐる民族誌』九州大学出版会。
- Takenami Masahiro
2012 「アメリカの高齢者と地域との関係(アリゾナ州サンシティの現状)」『九州栄養福祉大学研究紀要』9：141-154。
- 田原 裕子
2007 「合衆国におけるリタイアメントコミュニティ産業の展開——デル・ウェップのサンシティ・アリゾナを中心に」『国学院経済学』55(2)：209-230。
- 當山 富士子、戸田 圓二郎、田場 真由美
2003 「へき地山村に居住する独居高齢者の“生活の術”——参与観察で把握した生活実態から」『沖縄県立看護大学紀要』4：79-85。
- 中井 久夫
1987 「世に棲む老人」『老いの発見 4』伊藤光晴、副田義也、日野原重明(編)、pp. 156-180、岩波書店。
- 長田 久雄、原 慶子、萩原 悦雄、井上 勝也
1981 「老人の孤独に関する心理学的研究」『老年社会科学』3：111-124。
- 中村 沙絵
2017 『響応する身体——スリランカの老人施設ヴァディヒティ・ニヴァーサの民族誌』ナカニシヤ出版。
- パルモア、A.、前田大作
1988 『お年寄り——比較文化から見た日本の老人』片多順(訳)、九州大学出版会。
- パルモア、A.
2002 『エイジズム——高齢者差別の実相と克服の展望』鈴木研一(訳)、明石書房。
- 比嘉 政夫
2000 「長寿社会・沖縄の文化的背景——長寿儀礼を中心に」『老熟の力——豊かな〈老い〉を求めて』日本民俗学会(監修)、宮田登、森謙二、網野房子(編)、pp. 185-196、早稲田大学出版部。
- 平井 芽阿里
2012 『宮古の神々と聖なる森』新典社。
- 福井 栄二郎
2008 「「伝統を知らない」老人たち——ヴァヌアツ・アネイチウム島における老人の現在と社会構築主義批判」『国立民族学博物館研究報告』32(4)：579-628。
2015 「延長する「家」——日本とスウェーデンの聞き取り調査から」『社会文化論集：島根大学法文学部紀要社会文化学科編』11：17-36。
- 藤田 真理子
1999 『アメリカ人の老後と生きがい形成——高齢者の文化人類学的研究』大学教育出版。
- 藤原 武弘、来嶋 和美、神山 貴弥、黒川 正流
1987 「独居老人の孤独感と社会的ネットワークについての調査的研究」『情報行動科学研究』11：43-52。
- プラマー、K.
1998 (1995) 『セクシュアル・ストーリーの時代——語りのポリティクス』桜井厚、小林多寿子、好井裕明(訳)、新曜社。
- 古家 信平
2009 「年祝いにみる擬死と再生」『日本の民俗12 南島の暮らし』古家信平、小熊誠、萩原左人、pp. 36-93、吉川弘文館。
- ベン＝アリ、エヤル
1989 「大衆長寿とコミュニティーケアの挑戦——日本の都市近郊の老人会の研究」『民族学研究』54(3)：275-291。
- ボーヴォワール、S.
2013 (1970) 『老い 新装版 上』朝吹三吉(訳)、人文書院。
2013 (1970) 『老い 新装版 下』朝吹三吉(訳)、人文書院。
- 宮田 登
1996 『老人と子供の民俗学』白水社。
宮田 登、森 謙二、網野 房子(編著)
2000 『老熟の力——豊かな〈老い〉を求めて』早稲田大学出版部。
- ムーア、P.
1988 (1985) 『変装—A true story—私は三年間老人だった』木村治美(訳)、朝日出版社。
- 柳田 國男
1946 『先祖の話』筑摩書房。
1970 「親捨山」『柳田國男全集第十四巻』pp. 481-492、筑摩書房。

- 山折 哲雄
1991 『神と翁の民俗学』 講談社。
- 山田 昇
2019 「現代日本の老人問題と棄老伝説」『佐野日本大学短期大学研究紀要』 30 : 1-11。
- (英語文献)
- Atchley, R. C.
2000 *Social Forces and Aging: an introduction to social gerontology* 9th edition. Belmont, CA: Wadsworth.
- Burgess, Ernest
1969 *Aging in Western Societies*. Chicago: University of Chicago Press.
- Butler, R.
1969 Age-ism: Another form of bigotry. *The Gerontologist* 9: 243-246.
- Clark, M.
1967 The Anthropology of Aging, a New Area for Studies of Culture and Personality. *The Gerontologist* 7(1): 55-64.
- Clark, M. & Anderson, B. G.
1967 *Culture and aging: an anthropological study of older Americans*. Illinois: C.C.Thomas.
- Clifford, J. & Marcus, George E.
1986 *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*. California: University of California Press.
- Cowgill, Donald O. & Holmes, Lowell D.
1972 Aging and Modernization. *Contemporary Sociology* 2(5): 530-532.
- Cumming, E. & Henry, W. H.
1961 *Growing Old: The Process of Disengagement*. New York: Basic Books.
- Elana D. & Buch, E. D.
2015 Anthropology of Aging and Care. *Annual Review of Anthropology* (44): 277-293.
- Gubrium, J. & Holstein, J.
1999 The nursing home as a discursive anchor for the ageing body. *Ageing and Society* 19: 519-538.
- Gullette, M.
2004 *Aged by Culture*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Goodman, R., White, G. & Kwon, H. (eds.)
1998 *The East Asian Welfare Model*. London: Routledge.
- Havighurst, R. J.
1961 Successful Aging. *The Gerontologist* 1: 8-13.
- Henderson, J. & Vesperi, M.
1995 *The culture of long-term care: Nursing home ethnography*. Westport, Corn: Bergin & Garvey.
- Henderson, J. & Traphagan, J. W.
2005 Cultural factors in dementia: perspectives from the anthropology of aging. *Alzheimer Disease & Associated Disorders* 19(4): 272-274.
- Hochschild, A. R.
1978 *The unexpected community: Portrait of an old age subculture*. California: University of California Press.
- Holmes, E. R. & Holmes, L. D.
1995 *Other cultures, elder years*. Thousand Oaks, CA: SAGE Publications, Inc.
- Kahn, R. L. & Antonucci, T. C.
1983 Social supports of elderly: Family/friends, professionals. *Final report to the National Institute on Aging*. Grant No. AG 01632, 1.
- Kaufman, S. R.
1994 Old Age, Disease, and the Discourse on Risk: Geriatric Assessment in U.S. Health Care. *Medical Anthropology Quarterly* 8(4): 430-447.
- Keith, J.
1982 *Old people, new lives: Community creation in a retirement residence*. Chicago: University of Chicago Press.
- Leibing, A. & Cohen, L.
2006 *Thinking About Dementia Culture, Loss, and the Anthropology of Senility*. New Brunswick, NJ: Rutgers University Press.
- Lemon, B. W., Bengston, V. L. & Peterson, J. A.
1972 An exploration of the activity theory of aging. *Journal of Gerontology* 27: 511-523.
- O'Reilly, E. M.
1997 *Decoding the Cultural Stereotypes about Aging*. Oxfordshire: Routledge.
- Parsons, T.
1960 *Structure and Process in Modern Societies*. Chicago: Chicago Free Press.
- Reichard, S., Livson, F. & Petersen, P. G.
1968 Adjustment to retirement. *Middle age and aging, Chicago & London*. B. L. Neugarten (ed.), pp. 178-180. Chicago: University of Chicago Press.
- Riley, M. W. & Abeles, R. P.
1987 Longevity, social structure and cognitive aging. *Cognitive functioning and social structure over the Life course*. C. Schooler and K. Schaie (eds.), pp. 161-175. New York: Ablex.
- Simmons, L. W.
1945 *The Role of the Aged in Primitive Society*. London: Yale University Press.
- Sharma, A. N. (ed.)
2007 *Anthropology in Human Welfare*. New Delhi: SARUP & SONS.
- Shanas, E.
1961 Family relationships of older people. *Health Information Foundation Research Series, No. 20*: Health Information Foundation.

Sokolovsky, J.

2009 *The Cultural Context of Aging: worldwide perspectives*. Santa Barbara, CA: Praeger Publishers.

Warren, L.

1998 *Considering the culture of community care: Anthro-*

logical accounts of the experiences of frontline carers, older people and a researcher. *The Anthropology of Welfare*. R. Edsar, A. Russell (eds.), East Sussex: Psychology Press.

The Objectification of Aging in Anthropology: Appearing and Living Aging

Ayano SUGANUMA*

In anthropology, which was developed in the latter half of the nineteenth century, it is only relatively recent that the aging and the old aged have come to be treated as full-fledged research subjects. However, since the end of the 20th century, anthropological research on specific cases of the old aged has been steadily accumulating results, partly due to the aging of global population.

In anthropology, there are three perspectives on the subject of aging: (1) discussions in line with anthropological research themes such as religion and kinship, (2) discussions that look at aging as a social issue to be addressed, including the elderly who are caretakers, and, (3) discussions about the diversity of aging in the context of each society and at the aging that individuals experience.

In the process leading up to these objectifications, there have been challenging attempts and unceasing searches for answers to the changing conditions of all societies, including non-Western societies, which have been the object of anthropological research, and to the questioning of post-modern anthropological methods of setting and approaching the subject.

Furthermore, in recent years, there has been a tendency to approach local and specific cases, and it is assumed that the multifaceted and multilayered approach to the reality of aging and the lives of the elderly will be further enhanced.

On the other hand, excessive focus on individual cases may narrow the possibility of examining the phenomenon of aging, which is universal to all people, thus requiring further exploration.

Keywords

Aging, old people, objectification, research history, anthropology and aging, elderly

* Nanzan University